

大学生ソフトボール競技者における競技能力とライフスキルの関係
The Relationship Between the Competition Level and Lifestyles of University
Softball Athletes

1K07B198-0 翠川 ちひろ

指導教員 主査 堀野博幸 先生 副査 正木宏明 先生

【目的】

日常生活において必要となる心理的スキルとして、ライフスキルが挙げられる。ライフスキルはスポーツ活動を通じて獲得し、向上させることができると考えられている。上野・中込(1998)は、スポーツ場面において獲得可能な心理・社会的スキル(競技状況スキル、例えば、目標設定スキルやコミュニケーションスキル)と、スポーツを離れた日常生活場面で必要とされるライフスキル(Danish et al, 1995)との関係に注目し、運動部活動に参加している生徒は全く部活動に参加していない生徒よりもライフスキルを獲得していることを明らかにしている。

本研究では、東京都ソフトボール一部リーグの女子6チーム、男子2チームを対象に、大学生ソフトボール競技者を対象にアンケートをおこなった。ソフトボール競技者の競技成績や競技年数とライフスキルの獲得の関係、ソフトボール競技者が獲得できる因子を明らかにするために、アンケート調査を行った。

【方法】

2010年東京都大学ソフトボールリーグ1部に所属する男女、18歳から24歳の大学のソフトボール部員を対象とし、女子197名、男子59名、計256名にアンケート調査を行った。

調査1では、「ソフトボールの競技成績が高い者ほど、スポーツ時において高レベルの心理的競技能力を有する」という仮説1と、「ソフトボールの競技歴が長いものほど高レベルのライフスキルを有している」という仮説2を検証する。仮説1は競技レベルごとに群分けし、心理的競技能力とライフスキルの値を群ごとに分散分析で比較する。仮説2は競技歴ごとに群分けし心理的競技能力とライフスキルの値を群ごとに分散分析で比較する。調査2では、場面によるライフスキルの比較を行った。スポーツ場面のライフスキルとスポーツ以外の場面のライフスキルの比較を行う。また、競技レベルごとに群分けし、競技歴ごとにも群分けをし、各群において比較を行う。調査3では、大学生ソフトボール選手の心理的競技能力を多面的に測る新たな尺度を開発する。島本・石井の「日常生活スキル尺度(大学生版)」と上野・中込の「競技状況スキル尺度」を組み合わせて新たに因子を抽出し、大学生ソフトボール競技者向けの心理的競技能力測定尺度の開発を試みた。

【結果】

調査1では「スポーツ場面におけるライフスキル」にお

いて、3つのスキルにおいてトップ群が準トップ群に対して有意に高い得点を示し、1つのスキルにおいて準トップ群がノーマルに対して有意に高い得点を示した。このことから「ソフトボールの競技成績が高いものほど、スポーツ時において高レベルの心理的能力・メンタルスキルを有する」という仮説1は概ね証明されたといえる。調査2では全体のライフスキル(8スキル)、及び場面(スポーツ場面、スポーツ以外の場面)を要因とするt検定を行った。その結果、リーダーシップ[t(202)=3.489, p<0.001]と自尊心

[t(202)=34.665, p<0.000]において5%水準で有意差が認められた。リーダーシップでは「スポーツ場面におけるライフスキル」が「スポーツ以外の場面におけるライフスキル」に対して有意に高い得点を示した。自尊心では「スポーツ以外の場面のライフスキル」が「スポーツ場面におけるライフスキル」に対して高い得点を示した。調査3では、島本・石井の「日常生活スキル尺度(大学生版)」と上野・中込の「競技状況スキル尺度」を組み合わせた48項目を用いて、因子分析を行った。因子抽出法は重みなし最小二乗法、回転はプロマックス回転を用いた。その結果、2~6項目で構成される、7因子を抽出した。各因子は、協調性、チーム貢献思考、相談能力、情報収集能力、計画性、体調管理能力、自己肯定能力と命名した。

【考察】

大学生ソフトボール競技者は、競技能力が上がるに従って、より高レベルな心理的競技能力を有することが認められた、またそれは日常生活においても活かされていることが明らかとなった。しかし、ソフトボールの競技年数とライフスキル獲得の関係には関係性がないことが判明した。

調査3で作成された「ソフトボール競技における心理的競技スキル尺度(大学生版)」に関しては、今後、信頼性の検証などを経て、実用性のある尺度にしていく必要がある。またスポーツ選手が持ち合わせているであろうと予測できるスキル因子として、目標に向かってある物事を根気よく続ける「忍耐力」や、組織の中で自らの果たすべき役割を遂行する「責任感」などが挙げられるため、これらを測る項目を加えて尺度をよりよいものにしていくことが望まれる。ソフトボール選手の心理的競技能力を多面的かつ的確に測定し、それらがどのような日常生活のライフスキルに転用できるかを明らかにすることが、目下の課題といえるだろう。